

美学の しずく

森野 水琴

彼は文庫クセジュの「美学への手引き」という本を読んでいた。フランス語で書かれた原書を注文したところ改訂版であったので、日本語訳も買い求めたというわけである。

同書では美学という言葉が生まれる前からの美についての議論として、古典ギリシヤ語で書かれたプラトンの「大ヒippiアース」を取り上げている。

古典ギリシヤ語の授業で抜粋を習った作品であるだけに、もう少し真面目に勉強しておけば良かったと彼は悔やんだ。

英語の対訳本を買い、本格的に読む日に備えていた。

それから何年も経ち、彼は再び美学について学びたいと思った。

将来、フランス語で文を書くにあたっての素養としたいからである。

しずくのように少しずつ心の泉に受け入れ蓄えたい。

彼はプラトンの作品のフランス語訳の電子書籍から大ヒippiアースの部分を読んでいる。

本来は古典ギリシヤ語の原文を英語とフランス語の辞書を駆使して読み解くべきなのだが、まずはフランス語訳から読むというわけである。

日本語の私訳を作りながら仏文和訳の勉強をするつもりらしい。